

## 2 アンケート結果

本市に住む外国人の実態と意見を把握するため、本市に外国人登録をしている15歳以上890人中600人を無作為抽出し、アンケートを実施しました。172人の外国人の方からいただいた回答の結果をまとめました。(詳細はP27～P34)

アンケートの結果から、まず外国人が生活する上で言葉が一番の障害になっていることがわかります。これは短期滞在の外国人に特に多い障害ですが、10年以上本市に住んでいる外国人も同じ回答でした。生活上の不安や市民との交流・病院の診療時などでの障害では、全てに「言葉に関すること」が入っています。また、日本語が十分使えないにも関わらず、生活に必要な情報は、日本語のテレビやラジオから得ている外国人が一番多いため、日本語教育の支援が重要です。

また、生活で困っていることとして「習慣や文化の違い」と答えた外国人は、「言葉に関すること」、「物価のこと」の次に多くいました。日本で生まれて育った外国人にとってこの点での不便はありませんし、本市に長く住んでいる外国人の中には、日本の文化や習慣を既に勉強している外国人もたくさんいます。しかし、これから勉強したいと答えた外国人も53%と多いことから、日本文化や習慣を紹介する機会を更に増やし伝えていくことによって、外国人との交流を図り、文化や習慣の違いによる不安も取り除くよう努めなければなりません。

日本人との交流の障害では、「言葉の違い」の次に、「知り合う機会がない」と答えた外国人が回答者のうち16%でした。このことは市民が外国人と交流する機会が少ないことにもつながっており、お互いが交流できる機会をつくったり、その機会の周知に力を入れる必要があります。

また、市で入手できる外国人情報誌として活用しているものでは、「ゴミの出し方パンフレット」が3カ国語で提供できるためか、多くの外国人が利用しています。一方、「新居浜生活ガイドブック」は、生活に必要な情報が充実しているにも関わらず、利用者が31人とどまっているのは、英語のみの表記のためと推測できます。「日本語以外の言語による情報は不十分」と答えた外国人が50%いることから、多言語での情報提供が必要です。

充実してほしい情報は多岐にわたりますが、「外国語で相談できる窓口」、「税金や年金制度」、「日本語教室」の順です。直接外国語で相談できる窓口は市にないため、ボランティア団体や、各種機関と連携するシステムづくりが必要です。

その他研修生・実習生の中には、自分の税金についての十分な理解ができていない人がおり、受入れ企業や受入れ団体と連携をとり、納得のいく説明をしていかなければなりません。

市内の国際交流事業や地域の活動に関しては、比較的多くの外国人が参加しているようですが、「外国人を受け入れてくれる心があれば参加しやすくなる。」といった具体的意見もあり、これは、差別を感じたことのある外国人57%の意見にも関係があると思われます。地域住民一人一人の多文化共生の意識を高めていかななくてはなりません。また、「地域のイベント情報をもらえれば参加しやすくなる」といった意見もあり、外国人への情報提供や呼び掛けが必要なようです。

次に、防災について避難場所を知っている外国人と知らない外国人は同程度の割合でしたが、災害弱者に該当する外国人の安全を確保するため、避難場所の情報を提供し、緊急時の地域やボランティア団体と連携した対応システムの構築が必要です。

仕事については、特に不満のない人が32%いますが、研修生や実習生の多くが、賃金の不満を挙げています。労働に対する「賃金」を研修生・実習生に企業が支払っているわけではないので、「賃金」という言葉をここで使うことは不適切ですが、企業が支払う金額については、研修生・実習生も合意の上で来日しているためやむを得ません。しかし、その他契約内容と実際の内容が違うことや、きちんとそのお金が支払われないことへの不満などもあることから、受入れ企業や団体による適切な説明や対応が必要です。

次に、今回回答いただいたアンケート結果を外国人のおかれた状況ごとで見ると、それぞれ特徴のある傾向が出ています。

まず、日本で生まれ長年本市に住んでいる外国人は、日本人と同じ教育を受け、特に不自由を感じず生活しています。日本人の親しい友人も多く、わからないことはその友人に相談しています。生活する上で困ることは少ない一方、選挙権がないことを不満に挙げた人が3人いました。また、外国人として差別された経験を持っている人は、半数ほどいました。

本市に住む300人近くの企業に在籍する研修生・実習生のうち82人から回答を得ていますが、一番の悩みが日本語に関することと物価のことでした。3年間の短期滞在の研修生・実習生は、研修や実習をしながら日本語を学ぶことはなかなか難しく、日本語がわからないことにより仕事上のコミュニケーションなどに支障を来しています。

また、物価が高いため、企業から渡される金額について母国と比べると高額で

あるにもかかわらず、実際の生活では苦勞をしているようです。携帯電話やパソコンなども、母国に比べてかなり高額なため利用できず、通信手段がほとんどない状態で、母国の父母や友人と連絡が取れず寂しい思いをしている人が多くいます。

外国人の主婦にとっての悩みでは、「本音と建前がわからない」、「外国人ということで引け目を感じ、他のお母さんに積極的にこちらから声をかけにくい」など、保護者同士のコミュニケーションをとる上での悩みが挙げられています。ある程度日本語が使えても、言葉のニュアンスや言葉の裏の意味まで察し日本人と同じように付き合うことは難しく、一歩踏み込んだ日本語の勉強、また、外国人を温かく受入れる日本人の思いやりなどが必要です。

日本人と結婚し、日本人の家族がいる外国人主婦の中には、特に育児で困ったことがない人もいますが、出産手続きや、予防接種などに戸惑った人がいます。子どもが市内の学校に通っている外国人の保護者は、教育費が高いことと高校や大学進学について心配であると答えています。子どもが学校でいじめられることを心配する保護者がおり、学校における児童・生徒へのいじめ防止の教育と共に国際理解教育が重要です。また、学校の連絡を理解できない保護者もおり、伝達方法の検討が課題です。

留学生は、日本に来て半年から1年ほどの間に日常で使う日本語の習得が大体できており、それ以上の滞在年数で言葉に困っていると答えた留学生はいませんでした。これは同じ滞在期間の短い研修生・実習生とは異なる点で、日本人との交流が多いことがうかがえます。また、留学生のほとんどが日本人の親しい友人や、話しをする日本人がいると答えています。ボランティア団体との交流も充実しており、イベントへの参加や、情報誌の利用も積極的です。不安に思うこととしては、災害時や病気やけがの時の対処の仕方と答えており、普段の会話はできても、病院で具体的に症状を伝えることなどは難しいということがわかります。日本の文化や習慣には留学生全員が興味を持ち、またスポーツなどの活動にも参加しています。

以上のことから、外国人は、置かれた状態によって要求や悩みが異なるため、それぞれに合わせた施策を考えていくことが大切です。



1734・EPIC